

# 豪雪地帯での冬期の雪遊びに見られる子どもの姿と幼児期の 終わりまでに育ってほしい10の姿との関連性に関する一考察

－ 3・4・5歳児クラスの雪遊びの経験から－

大室 亜 樹 幼児教育科 非常勤講師  
高 桑 秀 郎 幼児教育科

(2023年10月2日受理)

## 〔 要 約 〕

本研究では、豪雪地帯の冬期の雪遊びに見られる子どもの姿と幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿について、マッピングを行い、その育ちについて考察を行った。

生活においては除雪作業などの不便が生じる重労働でも、自分の好きな人（親や上級生）と同じ行為をすることで、自分を好きな存在と同じにしたいという欲求を満ち、自分の存在を確認し、自己肯定感を高めることができる。さらに子どもにとって雪や水などの冬の事象は、興味・関心を駆り立てる魅力的な五感を刺激する最高の遊びの環境と言える。何よりも心が動く瞬間が沢山あり、主体的な活動として繰り返し行われることで、これからの学びへの繋がりを期待される経験を十分に積み重ねることができたと言える。

保育者は子どもの主体的な経験を支えるために、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿への理解を進めると同時に保育者同士の連携により、情報を交換・共有する機会を持ちたい。このことで、子どもの育ちの理解を進め、子どもたちに合った環境を準備し、主体的な遊び及び学びの機会を提供し、支え、主体的に生きる力を育んでいけるよう努めていけるようになる。

## I. はじめに

幼稚園教育要領と幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針、3法の改定に伴い、小学校就学前の姿を想定した「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下、10の姿と表現）」が示され、(1) 健康な心と体、(2) 自立心、(3) 協同性、(4) 道徳性・規範意識の芽生え、(5) 社会生活との関わり、(6) 思考力の芽生え、(7) 自然との関わり・生命尊重、(8) 数量・図形、文字等への 関心・感覚、(9) 言葉による伝え合い、(10) 豊かな感性と表現というように、10の姿に整理された。<sup>1), 2), 3)</sup>

保育所保育指針によれば、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿とは、保育活動全体を通して資質・能力が育まれている子どもの小学校就学時の具体的な姿であり、保育士等が指導を行う際に考慮するものである。」と示されている。つまり、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿や能力の目安を示したものであると共に、保育者が保育を行う際に考慮する事項にもなる。これらは保育及び幼児教育の観点のみならず、幼児期から小学校以降に続く学校教育全体を見渡し、急速な社会環境の変化の中で未来を生きる子どもにどのよう

な資質・能力を育んでいって欲しいかが示されている。<sup>4)</sup>

更に乳幼児の教育は、環境を通して行うのが特徴である。横山によると、育みたい資質・能力の3つの柱を育てるために、5領域の視点（0歳児は3つの視点）で捉え、幼児期の終わり（5歳児後半）に見られる姿を10項目にまとめたものが、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）である。<sup>5)</sup> また大関らによれば、10の姿、3つの資質・能力、5領域の関係性について、10の姿は「5領域におけるねらい及び生活を積み重ねることにより、『幼稚園教育において育みたい資質・能力』が育まれている幼児の具体的な姿であり、特に5歳児後半にみられるようになる姿」、更には「5歳児だけでなく、3歳児、4歳児それぞれの時期にふさわしい指導の積み重ねが『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』に繋がっていく。」と解説している。<sup>6)</sup> これらのことから、10の姿は5歳児後半に突然現れるものではなく、連続した育ちの中でそのような方向へ向かうことを期待することを意味していることが伺われる。10の姿は到達目標でも幼児期後半の完成形でもない。毎日の保育の積み重ねがその姿に繋

がっていくものである。付け加えて、この姿が個別に取り出されて指導されるべきものではない。

乳幼児期は、小学校・中学校・高校・大人へと人生を繋いでいく学びや生きる力の土台となる力を養う大切な時期である。この時期にどのような経験をしたか、人や環境等とどう関わり合ったかの経験によって、パーソナリティの形成や育まれる能力が大きく影響を受けることが知られている。つまり、乳幼児期の経験と遊びの在り方は、その後の人生の価値観を大きく左右する重要なものである。

特に遊びの支援においては、保育者が、子どもが自分で選んだやりたい遊びを夢中になって遊ぶこと、更にはそれを継続して遊び込むことができる環境を整えて、関わっていくことが必要となってくる。子ども自身が試行錯誤しながら考え、工夫して諦めずに挑戦を繰り返すことができる「子どもの主体的な遊び」が展開されることで、望ましい資質・能力の土台作りが成されていく。

これは、人は、有能感や自己決定感を実感したい基本的欲求を持っており、遊びにおける内発的動機づけの本質は、自己決定と有能さの認知に他ならない。<sup>7)</sup> 遊びを通じた経験は、自分たちの行っている活動は、人に指示されたものではなく、自分で決めて行っているという、自己決定感、自己の主体性に基づく活動であるということの実感と知的好奇心を満たしている充実感をもたらす。このことが子どもたち自身の、自己肯定感を高め、対象物への興味の深まり、次の活動への内発的動機づけに繋がっていく。つまり主体性の育みに直結する活動となる。

そこで本研究では、雪国の子どもたちが5歳児後半の時期に行う雪遊びを通して、幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿（以下10の姿）と、雪遊びの中で観られた実際の子どもたちの姿が、どのように当てはまるのかをマッピングし、その育ちについて考察、検討を行った。

## II. 事例研究

### 〈研究目的〉

実践園は豪雪地帯にあり、冬期間の外遊びは雪遊びが主となる。また5歳児にとって12～3月は保育園生活の集大成の時期であり、小学校接続に向けた活動も入ってくる。この時期に展開される雪遊びには、10の姿が、明確に表れることが推測される。このことから本研究では雪遊びに注目し、雪遊びを通した子どもの姿が10の姿のどの姿に当てはまるのかを可視化すると共に、子どもたちの雪遊びを通した育ちや保育活動での保育者の援助について検討した。

### 〈研究方法〉

本研究では、山形県M市の保育園の3～5歳児混合クラス12名を対象にして、保育園での生活や遊びの経験、保育実践と雪遊びを照らし合わせ、以下の方法で検討した。3～5歳児の混合クラスであるため、異年齢の関わりも考慮しながら5歳児の遊びを中心に検討を進めた。また園児のプライバシーに配慮し、名前はイニシャルで表示した。

本研究の対象の概要及び期間、そして、内容は以下の通りである。

- (1) 対象児 3～5歳児（以上児異年齢混合クラス）12名
- |      |      |      |     |
|------|------|------|-----|
| 3歳児： | 男児1名 | 女児1名 | 計2名 |
| 4歳児： | 男児1名 | 女児3名 | 計4名 |
| 5歳児： | 男児4名 | 女児2名 | 計6名 |

- (2) 実施期間 2021年11月～2022年3月

- (3) 実施内容

- ① 雪を中心とする冬の事象について、子どもたちがどのように捉えているのか、雪遊びの様子を観察する。
- ② 雪遊びから派生した遊びについて、子どもの興味の広がりや感じ方、育ちについて考察し、10の姿の視点で捉え、マッピングを行う。
- ③ ②の内容から、保育者の環境構成の在り方と直接的な援助について考察し、検討する。

- (4) クラスの様子

対象となる保育園は、豪雪地帯にあるため冬期間の戸外での遊びは雪遊びが主となっている。子どもたちが、毎年とても楽しみにしている遊びの中の一つで、冬が近づいてくるにつれて雪遊びへの期待は高まっていた。今回研究対象となるクラスは3～5歳児の異年齢混合クラスで、同じクラスの中で生活や遊びを共にしている。それぞれの年齢による発達等の差は見られるものの、年齢に縛られずにその年齢に応じた興味・関心・能力に応じて活動や遊びに取り組む姿が見られる。小規模な保育園であるからこそ、年齢を問わず、日常的に子ども同士が関わっている姿は、年齢差による違いによるぎくしゃくとした力関係（一方的で上意下達的な関係性）を感じさせることはほとんどない。

このクラスは好奇心が強く、興味のあることに対してじっくりと遊び込むことのできる子どもが多い。そのため、遊び始めると数時間、数週間、遊びによっては何ヶ月も継続した遊びが展開される。冬には「雪山研究所」と名付けた雪遊びが3ヶ月にわたり毎日続けら

れ、これまで経験してきた遊びや活動で培ったアイデア、技法を遊びに取り入れる姿が見られている。年齢の異なる子どもの集団なので、年齢の高い子どもたちは過去の経験から、遊びを始めるまで、更には遊びをより充実させるために、沢山の準備や段取りを自ら行っている。子どもたちは、自分たちの力で見通しを立て、雪遊びに対する明確な目的や楽しみを見出している。それは、それまでの遊びの経験から、事前に必要な準備についての見通しやより楽しむための工夫について、自分たちで考えたり、工夫してきたりしているから出来るようになったことである。また、前の年に自分たちより上の学年の子どもたちが行っていたことを覚えていて、それを真似ようとしている、あるいはその様子から、事前準備によって遊びをより楽しめるといふ見通しを持てるようになったことの表れと言える。

この5歳児の姿を身近に感じている3・4歳児の子どもたちは、自然と5歳児を頼り、憧れのまなざしでその活動を見ているため、自分たちも5歳児と同じようにやってみようという意欲につながる。5歳児にとっては、3・4歳児から頼りにされることで自分の存在価値や役割に気付き、年下の子たちにいい格好を見せたいという活動への意欲や活動への集中度合いの向上にもつながっている。また活動を通して自分への自信を強化してきた。

このように異年齢の子ども同士が同時に活動する雪遊びでは、互いの役割意識を自分たちで認識し、その認識に基づく自己を達成しようとする姿が見られる。自分の理想の活動の姿を年齢が上の子たちに見出し、その姿を目標として、自分たちで主体的に課題を設定すると同時に、これまで園生活で培った力を応用するなど、創意工夫や実験的試みといった姿を見ることが期待できる。

## (5) 観察記録

〈初雪が降った当初の子どもたちの遊びの様子〉

### ① 初雪観測

初雪が降った11月下旬、保育園の園庭にも薄っすらと雪が積もり、子どもたちは朝から雪の話題で持ち切りだった。何をして遊ぶか、道具はどんなものが必要など、友だち同士で意見を出し合い自分たちで雪遊びの計画を練っていた。このように友だち同士でワイワイ楽しむ子どもたちがいれば、窓際で1人静かに空から降ってくる雪を不思議そうに眺める子どももいた。

園庭に出ると、子どもたちは思い思いに雪に触れ、雪の感触を楽しんだ。手に雪を取り溶けていく様子を不思議そうに繰り返し観察したり、誰も踏み入れてい

ない真っ白な雪の上にそっと足をのせて足跡を付けたり、雪の上を駆け回ったり、雪を集めて雪だるまを作ったりと、初雪の日にはしか味わえない感動が子どもたちの表情から読み取れた。

### ② 氷の発見・気づき

冷えた日の朝、普段は水が溜まっている水槽に違和感を覚え、雪玉を水槽に向かって投げると、雪玉が水槽に張ってある氷の上を滑った。そのことで水槽の水が凍っていることに気が付き、どうして氷ができたのか疑問を持っていた。次の日はもっと厚みのある氷が張っており、更に疑問を深めていた。また、アスファルトの上も凍っており、長靴を滑らせてスケート遊びを楽しんだが、凍った雪道は滑って危険だという知識を保育園の交通安全指導で教わっていたため、雪道を歩く際には長靴のスパイクをオンにして滑って転ばないように工夫する姿が見られた。

### ③ 雪遊び

ある程度雪が積もると、更に雪遊びは盛り上がりを見せた。「雪山研究所」と名付けた自分たちだけの遊び場を作り、思い思いの遊びを展開していった。遊びは、友だちと一緒に協力して行うもの、1人でもくもく行うもの、数人のグループ単位で行うものと同じ空間でありながらも、メンバー構成や人数も変化を見せていた。その遊びの種類も雪だるま作りやかまくら作り、雪合戦、お店屋さんごっこ、色遊び、そり滑りなど、多様な雪遊びが展開されていった。

〈当初の雪遊びから派生した遊びや生活の姿〉

初雪が降った当初は、単純に雪で遊ぶといった姿がほとんどだったが、遊び込んでいく中で、子どもたちの遊びの姿や興味・関心に変化が見られた。

雪だるま作りを例に挙げると、雪玉を転がしていき大きくなった2つの雪玉を重ね合わせて雪だるまが完成したと喜んでいた子どもたちも、徐々に物足りなさを感じて秋に収穫した木の実や枝などを手や目に見立ててくっつけたり、寒そうだからと帽子に見立てたバケツを頭の上にかぶせたりと、遊びを発展させていった。また雪は気温が高くなると溶けて水になる性質を知ると、容器に雪を詰めて室内に持っていき、雪が溶けていく様子を観察し、雪の性質を確認すると、次は色をつけた雪を容器に詰めて室内に持っていき、その変化を観察した。更に、溶けた水は気温の低い場所に置くとどうなるのか、予想を立てて観察していた。雪か氷のどちらになるのか、友だち同士でその変化に期待をして観察していた。

このように、雪に触れていく中で遊びの展開がされると同時に、雪や氷の性質にも興味・関心を抱くようになっていった。

そこで、大関らが作成したカリキュラム表<sup>6)</sup>をもとに、雪遊びあるいは雪遊びから派生した活動に見られた子どもの姿を10の姿に当てはめてマッピングし、それらについてそれぞれの関係性について考察を行った。

### ●事例1 道作り

#### A 健康な心と体

5歳児が最初に戸外に出て、積もった雪を踏みしめ、雪遊び場までの道を作っていた。そのため、小さい子どもは安全かつスムーズに通ることができた。深く積もった雪に対し、身長の高い年齢の低い子どもたちが雪遊びをする場まで行くのに苦労するだろうと、誰に言われる訳でなく、比較的体格のいい自分たちが道を作ることで、低い年齢の子どもたちのことを思いやって、進んでその役割を行っていた。また、除雪車で積まれた雪と雪の間には、空洞ができていて、そこにはまってしまうと危ないと、危険を予測・察知していた。

#### D 道徳性・規範意識の芽生え

道を作るために使い勝手のよい大人用のアルミスコップは、数に限りがある。アルミスコップを使った

作業は危険も伴うため、安全面を考慮し、保育者と一緒にできる人数分の2個を子ども用として準備した。しかし、使い勝手の良さを知っている子どもたちは、子ども用のプラスチック製のスコップよりもアルミスコップを使用したがる。また家庭でも使ったことがある子どもは、スノーダンプも取り入れたいと提案してきた。安全面について保育者は十分に子どもたちに説明すると、最初は自分が早く使いたくて取り合いになっていたが、みんなで共有して使用するものだと理解し自分や友だちと早く使いたいという気持ちに折り合いをつけ、譲り合って使えるようになった。

#### E 社会生活との関わり

遊び場に行くまでに、小さい子どもたちも歩いたり、登ったりしやすいように、積もった雪を踏み固めたり、スコップを使って階段作りをしたり足場固めをした。年長児として、年下の子どもたちのことを思いやり、子ども集団の中での自分たちの役割を果たした。「ありがとう」と小さい子どもや保育者から感謝される経験をしたことで、人の役に立つ喜びを感じることができた。

#### F 思考力の芽生え

雪を踏み固めながら、フワフワして踏み固めづらい時もあれば、氷のように固くて踏み固めなくても歩け

表：雪遊びあるいは雪遊びから派生した活動に見られた子どもの姿と10の姿のマッピング

5領域	健康		人間関係			環境			言葉		表現
	A 健康な心と体	B 自立心	C 協同性	D 道徳性・規範意識の芽生え	E 社会生活とのかかわり	F 思考力の芽生え	G 自然との関わり・生命尊重	H 数量・図形・文字等への関心・感覚	I 言葉による伝え合い	J 豊かな感性と表現	
事例1 道作り	○			○	○	○					
事例2 設計図	○	○	○			○		○	○		
事例3 研究室	○	○	○								
事例4 色遊び	○					○					○
事例5 氷とつらら	○				○	○	○				○
事例6 カラフル氷					○	○	○	○	○		○
事例7 雪の結晶						○	○	○			○
事例8 固雪渡り	○	○		○			○		○		○

る時もあることに気付いた。同じ雪でもどうして違いが出てくるのかといった、降った雪の性質について興味を抱いた。道を作りながら子どもたちは「ふわふわの雪は軽くて掘りやすいね」、「降ったばかりの雪だからふわふわするのか」、「でもズボズボぬかって進むのが大変だよ」、「下の方は固くて掘りにくいけど歩きやすい」、「どうして違うのかな」、「下にあるってことは何度も歩いたから固まったんだよ」、「寒いところにずっとあるから氷みたいになっちゃいけない」、「除雪車が積んでいった雪も固いよね」などと、これまでの経験を踏まえて自分たちの意見を出し合い考えたことを話していた。その中で「どうして同じ雪なのに違いがあるの?」と疑問を持つ子どももいた。保育者は、毎日同じ場所で雪の状態と一緒に観察することを提案した。また、雪の性質について実際に見るだけでなく図鑑やインターネットなどでも調べることにした。すると、実際に目で見えた雪の性質の違いを図鑑などで調べることでより詳しく知ることができ、雪の性質にも関連した遊びを進めていく姿が見られるようになり、子どもたちの考えや遊びにより深みが現れていった。

## ●事例2 「雪山研究所」設計図作り

### A 健康な心と体

普段している雪遊びだけでは物足りなくなってきたK・O児は、園庭いっぱいに広がる「雪山研究所」の設計図をメモ用紙に描いた。雪遊びで自分がやってみたいことを思いつづままに描いた設計図には、たくさんの工夫が盛り込まれていた。遊びをもっとおもしろくするために、主体的に考え、取り組もうとする姿が伺えた。

### B 自立心

自ら設計図を考えて遊び場を作る計画には、自分たちの力で遊びを編み出して実行しようとする力、工夫を凝らしながらも諦めずにやり遂げようとする力が必要である。設計図を作るといった発想が生まれたことで、アイデアを具体化し、更に自分で考えて工夫しようとする力が発揮された。

### C 協同性

設計図を作るという一人の発想がクラス全体に共有され、雪山研究所の設計図は大判用紙に描くことになった。自由に描いていくスタイルにすると、気が付くとクラスのほとんどの子が自由遊びの時間や活動の合間に思いついたことややりたいことなどを描いていた。一人で考えていたことも設計図の用紙を共有することで、子ども同士のコミュニケーションが生まれ、

自分の考えを友だちに伝える、友だちの意見を聞くということが自然な形で行われていた。

### F 思考力の芽生え

設計図は、雪山研究所での遊びと並行して進めたことで、新たな気付きや発想が次々に付け加えられていった。戸外で五感をフルに働かせて感じたことや不思議に思ったこと、発見したことなども自由に描き足していくことで、思考力を高めるきっかけとなった。

### H 数量・図形、文字等への関心・感覚

設計図での説明は絵に文字を付け加えることで、より分かりやすいものになると考えた子どもたちは、ひらがな表を見たり、保育者に教えてもらったりしながら、説明書きを付け足していった。自ら必要性を感じ、文字への関心を持ち、必要な情報を設計図に加えるという、文字を活用することへと繋がった。

### I 言葉による伝え合い

設計図を見ながら雪山研究所のイメージを伝え合うことで、新たな遊びのアイデアが生まれたり、遊びの展開が想像以上のものになったりした。時には意見がぶつかり合うこともあったが、必要に応じて保護者も仲立ちしながらよく話し合う中で、自分の意見を伝え、相手の話を聞きくといった伝え合うことの楽しさを感じることもできたようである。更には相手が伝えようとする先に、自分と同じように相手にも思いがあることに気づき、それを理解して自分の中に取り込んでいく作業ができた。

## ●事例3 研究室作り

### A 健康な心と体

研究室は雪山研究所の拠点となる場所であるため、子どもたちはどの場所を作るか慎重に検討した。場所の条件として、誰にも邪魔されないこと、継続して行えること、安全であることの3つがあがった。特に安全な場所を作ることは必要なため、軒下は屋根に積もった雪が落ちてきて、危険だと判断できたので、軒下は候補から外すことを提案できた。毎月行われる安全教室での学びや冬の生活の中で経験が生きていることが分かった。

### B 自立心

設計図を作る段階では、「地下」、「卵型」、「作業台」とキーワードを並べて、考えを出していった。実際に雪で作ってみると様々な困難があり、作業台作りでは、研究材料置き場やライト、チェスト、広い作業

台とイメージはしっかりあったものの、雪やスコップの扱いがうまくいかず思い通りに作業が進まず、悩む場面があった。保育者にアドバイスしてもらい、時には大人用のアルミスコップを使って何日もかけて作業を進めていった。最後の方は保育者の手をかりなくても、仲間同士で力を合わせて作り上げることができた。

作った作業台に雪が降り積もると、積もった雪を掘る所から始めなければならないが、誰も文句を言うことなく進めていた。最初の頃は、保育者を頼っていた子どもたちも保育者や共通の目的を持つ友だちと一緒に活動することで、難しくても自分たちの力で作ってみようという気持ちが強くなっていった。完成するとその場での遊びが盛り上ったのは、最後までやり遂げた達成感や満足感を味わったからである。

### C 協同性

研究室作りは、3人ほどの小集団で行われていたので、個々の思いや考えを出しやすく、話し合いもうまくまとまり、協力して作っていくことができた。少人数のクラスのため、日頃から仲間意識が強く関係性も深いことが、共通した目的を持ち、協力しながら遊びを進められたことに繋がったのだと推測される。

## ●事例4 色遊び

### A 健康な心と体

戸外へ雪遊びに行く頃になると、子どもたちはペットボトルに色水作りをして雪遊びの準備を始めるようになった。室内での自由遊びの時間に色水を作っておくことで、スムーズに雪遊びの時間に色水を使うことができるように見通せるようになったからである。自分たちで素早く材料を準備して取り組めたのは、夏の色水遊びの経験が生きていることが伺われた。夏に行った活動を冬の活動に転用するなど、雪遊びをより面白くするための工夫が見られた。

### F 思考力の芽生え

研究室の作業台では、雪に様々な色をつけて混ぜ合わせたり、色水の量を変化させることで雪に色が付く深さを比べたりと、多様な実験が進められた。赤色と青色をつけた雪を混ぜていく過程で、マール状に色が混ざり合い、次第に紫色に変化していく様子に感銘を受けていた。このことから、もっと様々な色を混ぜることで、もっときれいな色ができるのではないかと予想して実験してみると、予想とは異なり、黒っぽい色になり、失敗したと感じたが、友だちのアドバイスも受けながら失敗ではなく、それを黒色の雪をチョコレートに見立てて、お店屋さんごっこをしている友だ

ちの所に持っていき、使ってもらうことにした。初めは失敗として捉えても、それを活かした遊びへと転換できる力が付いていった。

### J 豊かな感性と表現

色が変わっていく美しさや不思議さを間近で見ていることで、心が動かされていく姿があった。単色の色水を個々に雪に混ぜると、じわじわと雪にしみ込んでいき、その現象に「わあ」と目を見開き、興味を示した。このしみ込む様子を面白いと感じ、色を変えて繰り返し行った後、黄色と青色をつけた雪同士を混ぜ合わせてみると、混ぜ合わせ具合によって色がマール状に変化していった。更に混ぜ合わせていくと黄色と青色が混ざり合うことで、徐々に緑色へと変化していった。「色水は一気に緑色に変わるけれど、サーティーワンのアイスみたいにマールになって、次はメロンアイスの様になっていったよ」と興奮した様子を見せた。更に沢山の色を混ぜていくと、黒に近い茶色へと変化していった。自分でやってみたいという思いで行った実験から、新たな発見や発想が生まれ、遊びにも変化が生じた。視野を広く持ち、お店屋さんごっこをしている友だちにチョコレートに見立てた雪を提供して、色の変化を共有することで心を動かされた体験を、友だちと共有することができた。

## ●事例5 氷の発見とつらら

### A 健康な心と体

氷を発見してから観察を重ねていくことで、寒い日には氷ができて、冷え込みが厳しいほど氷は厚くなっていくことに気づいた。また氷柱に関しても、観察を重ねていくうちに、日中は気温が上がり、雪が解け、夜に気温が下がることで、氷柱がより大きくなっていくことにも気づいた。観察をしていく中で、自分でも氷を作りたい、それを遊びに生かしていこうというように、遊びの見通しを自然現象の観察の中から導き出すことができるようになった。

### E 社会生活との関わり

氷や氷柱ができる事象には、気温が関係していることに気付いた。K・O児は日常生活の中で、朝、父親と一緒に新聞の天気予報欄でその日の気温や天気を調べて、その情報を元に、氷ができるかできないかの根拠としていた。遊びに必要な情報を取り入れ、それに基づき判断することができ、氷作りに役立てることができた。

### F 思考力の芽生え

一晩で水が氷に変化する事は、子どもたちにとって不思議な現象で、興味を持ったようである。「なぜ凍ったのだろう」と疑問を持ち、「寒くなったからではないか」、「夜は太陽の光が当たらないから」などと、自分なりに考え、仮説を立てて観察を行っていた。観察結果に基づき、その過程と原因を追究しようとしたり、推測したりすることは、身の回りで起きている事象を科学的に捉え、その理屈を知ろうとする知的欲求の表れであり、また原因を推測するなど、思考力を駆使した知的活動を行っている。実際に見て触れて主体的に行動に移したことが、五感を働かせて感性を高めることにも繋がっている。

更に水から氷、氷から水への変化は、水という物質の性質を感じ取り、水という物質の状態は変化するのであることに気付き、知ることができた。この気付きや経験は、小学校以降の系統的な学習にも役立つことが期待できる。

#### G 自然との関わり・生命尊重

冷えた朝に水槽の中の水が凍っていることに気付いてから、自然は変化していくものだと感じ、より自然事象に対する興味・関心が湧いた。寒い冬の気候がもたらす自然現象を自分自身の遊びの経験を通じて、体感したことが、より身近な自然事象への興味・関心を寄せることになった。それは毎日戸外に出て、思う存分遊び、冬の事象について、五感を通じた経験と観察・検証を十分行うことができたからこそと推測される。

#### J 豊かな感性と表現

氷柱をトレーに入れて、気温差による変化を観察した。一度溶けた氷柱が再び凍ると別の形に変化して凍った。それを見て「恐竜みたいな形」「蛇が太った」など、感じたことを様々に表現する姿が見られた。これらは、子どもたちが再凍結した氷柱の形を見て、感じたままの感性で表したそれぞれの表現である。形から連想して、具体的なものと結びつけたり、何かに見立てたりするという抽象的な思考を具体的な言葉で表すという表象の活動となった。

### ●事例6 カラフル氷

#### E 社会生活との関わり

保育者が、新聞に掲載されていたカラフル氷の作り方の記事を掲示すると、氷の変化に興味を持っていた子どもが、記事を見ながらカラフル氷を作るための材料集めを始めた。興味のある情報をキャッチして、自分の経験と照らし合わせながら遊びを展開していこう

とする姿は、広い視野を持ち、様々なことに関わろうとする力がついてきているからこそその姿と捉えることができる。

#### F 思考力の芽生え

新聞記事に掲載されていたカラフル氷の作り方は、水性ペンで色を塗った卵パックに水を入れて凍らせるといったものだった。やり方はそれぞれ異なり、その通りにやってみたり、もっと違うやり方があるのではないかと考えたり、目的は同じだが、それぞれの考えやアプローチの仕方が異なっていた。これは遊びに対して真剣に向き合い、これまでの経験に基づいて新たな考えを生み出そうとしたりしているからこそ見られる姿である。氷作りは繰り返し行われ、その度に油性ペンを使用したり、水ではなく雪を入れたり、パックへの色の塗り方を変えるなど、様々な方法が試された。同じ遊びを繰り返しているように見えるが、その都度、新しい気付きを反映させて、試行を繰り返していた。その度に新しいものが生まれ、自分の考えを生み出す喜びへと繋がっていった。

#### G 自然との関わり・生命尊重

色をつけたカラフル氷を作ることが目的で始まった遊びだが、自然現象により氷が溶けて水になったり、水が凍って氷になったりする様子にも興味を抱き、雪を溶かして水にして更に凍らせることを繰り返し試し、観察した。そこから「どうして寒い環境下でも、水は氷に変化するが、雪には変化しないのだろう」といった疑問を持つようになった。自然現象やその科学的法則に対する興味・関心がより深まっていった証である。

#### H 数量・図形、文字への関心・感覚

卵パックから取り出した氷の数を数えると、1つの卵パックから10個の氷ができることや、氷がなくなった卵パックの穴の数も数えると10個あることに気が付いた。そこから2つのパックで作ると20個の氷ができることも予測した。また、色別に氷を並べて同じ色が何個あるかを数えてみた。様々な方法で数を数えることで、数にはまとまりがあることに気付き、それは遊びの中でも何かしら使用できるのではといった感覚をもつことができた。

#### I 言葉による伝え合い

カラフル氷が出来上がると「雪山研究所で研究に使うおうよ」、「いろいろな色があるけど、同じ所に入れたらどうなるのかな」、「暖かい所に置けば溶けてミックスジュースになるんじゃない」などと、意見を出し合

い、この氷を次はどのように遊びに取り入れて展開していくかを話し合っていた。カラフル氷作りで経験したことや気づいたこと、更にはこれからの遊びでやってみたいことを言葉にして伝え、気持ちを共有していた。お互いの遊びのイメージを言葉として表現し、相手の遊びのイメージを理解したことで遊びに対するイメージが具体化し、期待が膨らんでいった様子が伺えた。

### J 豊かな感性と表現

出来上がった氷は様々な色の付き方をしており、太陽の光に当てると宝石のようにキラキラと輝いた。色の濃さや光の当たり具合により見え方が異なるため、その輝きは子どもたちの心を動かし、手の平に乗せてじっくり観察したり、規則的に鍋に並べたり、お店屋さんごっこの材料に取り入れれたりして、遊び方に広がりを見せて行った。

また素材の特徴を生かした素材選びもしていくことができた。使用するペンは水性ペン、油性ペン、クレヨンに、容器は卵パック、牛乳パック、プリンカップというように、素材を変えて氷作りを行った。ペンに関しては、水性ペン以外は色が付かなかった。しかし以前、油性ペンと水性ペンで描いた絵に雨水をあててにじみ絵にした時に、油性ペンはにじまなかったことを思い出し、その体験をもう一度確かめようとして行う様子が見られた。以前、経験したことを似たケースにも当てはめ、繰り返し行うことで、様々な素材の特徴を知り、素材に合った表現方法を探っているように受け止められた。

### ●事例7 雪の結晶

#### F 思考力の芽生え

雪を丁寧に観察した時、雪は一つひとつが結晶で図形の形になっているのはどうしてだろうと疑問を抱いていた。五感を研ぎ澄まし、じっくり観察することで結晶は見えてくる。自分の目でしっかり見て感じ、興味をもったからこそ生まれてくる知的な好奇心で、その形の生成の過程を想像している、あるいは知ろうという意欲を見てとることができた。

#### G 自然との関わり・生命尊重

冷えた朝、太陽の光に当たった雪が輝いて見えた。その光景に感銘を受け、雪をじっくり観察すると、雪にも一つひとつ形があることに気付いた。特に気温が低いほど、雪の結晶は一つひとつの形がはっきりと見えることに気付いた。

### H 数量・図形、文字への関心・感覚

雪の結晶を図鑑や絵本を使って調べてみると、様々な形があり、その形は雪ができる時の気温や湿度などによって変化することを知ることができた。雪の結晶の多くが六角形のもが多く、六角形という形に出会ったことで図形への興味・関心が湧いてくる様子が伺えた。

### J 豊かな感性と表現

雪の結晶の美しさを表現してみたいと訴えてきた子どもたちに、保育者は折り紙を使った切り紙を提案した。銀色や白色、灰色とそれぞれ選ぶ色は異なったが、子どもたちの雪の結晶の感じ方の多様さが色選びにも表れた。切り紙は、切り方によって無限の模様ができるので個性あふれる作品が出来上がった。それぞれの作品を雪山研究所の設計図に貼ったり、家に持ち帰って家族に見せたり、友だちと比べたりしながら、結晶の形を通して図形に親しみ一つの表現方法として楽しむことができた。

### ●事例8 固雪渡り

#### A 健康な心と体

スノーウエアや長靴、手袋などを装着して長い距離を歩くことは、不安定で滑りやすい中でバランスを取り、体幹や足腰の強化と同時に体力が必要となり、更には最後まで歩き切るといった忍耐力、つまりは心の育ちも関係してくる。これまでの遊びや活動の中で体を沢山使ってきた子どもは、自ら先頭をきって広い田んぼをどこまでも歩いていくことができた。一方で体力があまりない子どもは、途中から近道に切り替えていた。一人ひとりの体力に合わせ安全を確認した上で自由に歩けるようにし、それぞれが精一杯歩ける距離を歩いて楽しむことができた。

また固雪ではあるが、薄っすらと見えるくぼみは水路であることを伝えた。この水路があることは雪が降る前にも確認していたため、子どもたちはそこに近づけば危険であることを分かっており、くぼみを避けて歩くことができた。

#### B 自立心

広くどこまでも続く田んぼ道を歩くことは、体力の他に諦めずに自分の力で歩くといった気持ちを強く持つことが大切になる。目的地を決めて休憩をはさみながらみんなで一緒に歩き、楽しみながらも、一生懸命にやり遂げようとする気持ちが伝わってきた。

#### D 道徳性・規範意識の芽生え

歩いている途中で疲れ動けなくなった子どもがいるのを聞いて、先頭を歩いていた数人が「助けにいこうよ」と、今まで歩いてきた道に戻り迎えに行く場面があった。友だちが困っていたら寄り添いたいといった、相手を思いやる気持ちが見られた。

#### G 自然との関わり・生命尊重

いつもは長靴が埋まってしまうほど、雪が深く積もった場所でも、夜の冷え込みが厳しかったことにより、雪が固く締まり、固雪わたりができた。同じ冬でも、より気温が下がると雪が固く締まって、立ったり、歩いたりすることができるという経験をしたことにより、冬の自然現象への関心を高め、よりその活動を楽しむことができた。

また、気温が低く空気が澄んでいて晴天の朝というように、一定の自然条件でしか経験できない固雪渡りであるため、新たな発見もできた。カリカリ、サクサクと気持ちのいい音がしたり、雪が氷の粒のようにくっきり見えたりする結晶は「ダイヤモンドみたい」、「ママにプレゼントしたい」と子どもたちの美的感性の琴線に触れ、驚きの歓声が尽きなかった。自然の美しさや神秘性に触れ、それらを身近なものとして感じることができたようである。

#### I 言葉による伝え合い

冬期間、雪が積もっていて、固く締まっている雪の状態の時でないといけない場所に足を踏み入れたことで、いつもとは違う景色を見ることができた。それは、子どもたちの感情を揺さぶり言葉として表現し、伝え合うことにも繋がっていた。キラキラ輝く一面に続く世界を「ダイヤモンドがいっぱいの宝石箱だね」、「キラキラしすぎてまぶしいよ」などと、雪の輝きに感銘を受けて言葉にする姿や、「虹色のシロップをかけてかき氷屋さんになるんじゃない」と遊びにつなげていこうとする姿、ある映画のワンシーン（映画「タイタニック」）をみたことのある子は、その場面とこの一面に広がる世界をリンクさせて「ここは南極の氷河の一角、さあ出発だ、みんな船に乗って」と船で大海原を冒険するイメージを膨らませ、近くにあった桜の木を雪山に刺して手を広げた。同じ景色を見ても一人ひとりの感じ方は様々である。一人ひとりの想像したことや感性を様々な言葉で表現し、イメージを拡げる様子が見られた。言葉として表現することで、自分の中だけにあるイメージが他児に伝播し、時には個々のイメージが合わさり、新たな想像の世界が広がっていく姿も見られた。豊かな体験をすること

で、それに合う言葉で表現したいという気持ちが掻き立てられ、保育者にどう表現したらいいのか相談することもあった。壮大な自然の中での経験は、言葉の遣い方、言葉による表現を豊かにすることにも繋がっていった。

#### J 豊かな感性と表現

雪の上でブリッジや側転、前転など、固雪だからこそできることがあると考えた子どもたちは、体全体を使ってそれらを試し、表現していた。

目的の場所に到着すると、小高く雪が積もった場所に木の枝を刺して「到着したぞー」と大きな声で呼び、達成感を味わっていた。他児もつられて真似をし、共に同じ表現をして同じ感情を共有した。

### Ⅲ. 考察

雪国の子どもたちにとって、雪が降ることは当たり前であるが、不思議な冬其自然現象であると共に、楽しみの一つでもある。雪が降り一変した別世界の景色は、子どもたちの心を大きく動かす。子どもたちはこの感情を基にその先にある遊びや活動へと向かっていく。保育者は、子どもが素直に感じたことを受け止めると共に、子どもの育ちについて考え、子どもの興味と活動を繋ぎ、子どもの育ちを支えていく必要がある。子どもの心が動いた時こそ、様々な感情や興味・関心が生まれ、行動に対する内的な動機づけとなっていく。その時に保育者が子どもの心の動きを敏感に捉え、思いを受け止めることで、子ども主体の遊びや活動の展開へと繋がっていく。また子どもの心が動いて自ら何かをやりたいと思った時に、保育者の見守りや一緒に活動するという姿勢、子どもが意欲的に働きかけたいと思える環境を整えることが、子どもの主体性を伸ばしていくことに繋がる。心の動きははっきりと目に見えるものではないからこそ、保育者は普段から、子どもの興味や関心、能力を見極め、普段の活動で何を経験し、何を感じているか、多様な視点で子どもの理解を進めることが必要になる。心が動くままに遊び、その原体験を繰り返していくことが、子どもの心と体を豊かに育み、主体性を育て、生きる力の源になっていく。

今回、雪遊びの観察を通じて、子どもが自然環境に触れ、その活動を通じて、様々な経験をしてきたことが、10の姿として現実に現れ、マッピングすることができた。

初雪の例では、自分の手で雪をとって感触を味わった時に子どもの心が動く瞬間が見られた。その姿は、じっくりとその感触や感覚を楽しみながらも、その先

にある遊びにどう繋げていくか考えて行動し、主体的に遊びを進めていた。子どもたちは、日常的に自らやりたい遊びを見つけて、友だちと一緒に対話しながら遊びや活動を進めている。それは雪遊びでも同じような姿が見られ、初雪での体験から派生した「雪山研究所」の遊びは、一人ひとりが興味・関心を持ち取り組んだことが、次第に個々が刺激し合い友だち同士で話し合っただけで遊びを進めていくようになり、自分達の秘密基地のような空間の中で継続した遊びが展開された。遊んでいく中で、疑問や不思議なことが生まれるのは自然なことである。中でも、冬期の厳寒という環境がもたらす水の物質の状態の変化と雪というその時期しか見られない、でも身近な物質の性質についての興味・関心は雪遊びを通して、触れ合っているからこそ生まれたものと言える。また、それを一人で解決できない時には、友だちや保育者と対話しながら様々な方法で解決へと導いていく。うまくいなくても対話することで、新たな発想を生み出し遊びへと発展していく姿こそ、対話的な学びを展開していると言える。

更に深い学びについても、雪山研究所で様々な形で見受けられた。カラフル雪の実験では、赤色と青色に色をつけた雪玉を2つ透明カップに入れて、室内と戸外に置いてみた。戸外に置いたカップの中身に変化はないが、室内においたカップの雪は時間の経過と共に、2色が少しずつ混ざり合い、完全に溶けると紫色の色水に変化した。このことは「雪は温度によって変化するもの」という子どもたちが持っていた知識が、実際に実験することで「やはりそうだった」と確信することができた。実験を通して、仮説や疑問を実証・解消し、自分たちの学びとしている。更に色という概念に対しては予測以上のことが起き、子どもたちは興奮した様子を見せた。夏に経験した色水遊びで、赤色と青色を混ぜ合わせると紫色になるということは知識としてあった。色の違う雪を混ぜ合わせてみるとどうなるか、子どもたちはそれぞれに予測していた。赤色と青色の2色に分かれて層ができると予測した子、紫色に変化すると予測した子の二手に分かれたが、変化していく様子を観察していく中で、自分が予想したことにとらわれずに、少しずつ混ざり合っていく不思議な色の変化にどの子も魅了されていた。変化の姿までは予想しなかった子どもたちは、新たな体験をすることができただけでなく、新しい知識を、実体験を通じて得ることができた。雪が溶けていく様子や色が混ざり合う様子を見たことで、更に印象強く、この事象についての知識を得たと言える。このような遊びの中での経験は、これから先の人生の中で予測しなかったことが起こったとしても、やり方を変えてみる等の工夫で切

り抜けられる力に関わってくる。つまり与えられた課題を達成するよりも、自身が関心のあることに対して実際に仲間と主体的に対話しながら、試行錯誤して試すことで、多くの経験を積み、その試行の結果を知るという単純な知の経過だけでなく、自分の知らない情報を調べて、試行するための方法を探る、その結果どうだったか、その試行と結果の因果関係について知るといった深い学びになり、他の遊びやこれからの学びにも応用が可能な力へと繋げる経験を得たことになる。このような展開にまで発展するには、一つの遊びが断片的に行われているのではなく、遊びや活動は連続していることを念頭において保育すること、子どもたちの遊びや試しを支援して行けるだけの環境を保育者が準備していくことが大切である。

以上のことから、雪山研究所という大きな遊びのテーマの中に、枝分かれするように遊びが多方面に展開され、冬期間において継続して遊び込んでいくことで、主体的・対話的で深い学びが自然と行われ、育ってほしい資質・能力の育成に寄与する遊びとすることができたと考えられる。

本園では、乳児期から積極的に冬の事象に関わり、雪遊びを継続して行っている。未満児は雪に親しむことをねらいとし、安全面、健康面に配慮し、無理のない範囲で雪遊びを楽しんでいる。0・1歳児は、室内で雪に触れることから始め、少しずつ戸外に出て雪に触れて遊ぶことで、徐々に冬を五感で感じるようになるように工夫している。雪は冷たく外は寒いといった感覚を、負の感情として受け入れることのないような配慮も必要である。慣れてきたらソリに乗ったり、保育者と一緒に砂遊びのような感覚でシャベルなどを使ってカップに詰めたりするなど、楽しめるように保育者は一緒に遊びながら関わっている。また2歳児になると、以上児の遊びの中に憧れを持ち同じことをしたいという気持ちが育っているため、個々の気持ちをくみ取りながら、以上児の遊びに混ぜてもらえるようにしている。それでも、体力や体の発達面からみるとまだまだ危険を伴うこともあるため配慮は必要である。雪への興味・関心が強くなり「なぜ」、「どうして」と疑問を投げかけることが増えてくる時期でもあるため、保育者も冬の事象と一緒に感じながら、観察したり、疑問に答えて子どもの心に届くような工夫をしたりしている。このように、未満児の頃からその先にある育ちを見据えて、少しずつ身近にある季節性の不思議な環境・雪に関わっていくことで、以上児になり、自分たちで遊びを進めていく時にも抵抗なく遊びこむことができるようになる。

今回の雪遊びの事例でも分かるように、以上児も雪

や氷などの冬の自然事象に抵抗なく関わる事ができた。乳幼児期から、子どもも雪や氷を身近な環境の一つとして十分に触れ合うことで、その性質を理解すると同時に、更なる疑問を持ち、色々試してみたいという好奇心を抱いて、自分たちでその疑問に対する解決の手法を色々探ることができる。その中で保育者の役割は、あくまでも子どもの欲求を理解し、子どもの自発的な行動を大切に、それが遊びへと発展するよう存分に遊び込める環境を準備することである。乳児期から10の姿をイメージしながら保育することで、今その子はどのような発達段階にあるのか、この先どの部分を伸ばしていくことが必要なかを捉えることができ、保育を振り返る目安ともなる。子どもの発達の理解と保育者の援助の方向性を確認する育ちの過程の大きな指標の一つとして、子どもの育ちを支えていく目安として捉えていきたい。

また日々変化していく子どもの姿を、保育者は敏感に捉えて反応し、子どもたちと丁寧に関わりながら、保育者としての援助の在り方を考えていくことも大切である。日々の生活や遊びの振り返りを続けていくことで、子どもの育ちの理解をより深く行うことができ、何が育ちつつあるか、何が出来て、どんなことに興味を抱いているかの把握がより正確に行うことができる。また保育者の日々の関わりについても振り返ることができるので、今日の反省を次の日に活かすことができ、保育の質を向上させることが期待できる。とりわけ、雪遊びは天候や気象状況によって、次の日の活動が変わって来るので、臨機応変に対応していくことが保育者には求められる。保育者として子どもの姿を肯定的に捉え、豊かな育ちへと導いていけるように、多角的な視点から子どもの遊びを援助する手立てを考えていく必要がある。

同じ遊びでも、与えられた遊びと自ら行う遊びでは意味合いが全く異なる。与えられた遊びは、その遊びの中の課題を達成すれば終わりになるが、自ら行う遊びは、自分の興味や欲求が満足する、あるいは尽きるまで自分の意志で行われることになる。小学校以降の学びの場でも同じことが言える。興味・関心を持った主体的な遊びに対しては、まず意欲が異なり、自分自身が納得するまで活動することで、探求すること、工夫すること、試行錯誤すること、それらの結果のすべてが自分自身の生きた学びになっていく。またそれだけでなく、自分のやりたいことをやったという自己決定の経験は、自分自身を肯定する自己肯定感の強化とともに、自身の有能感や存在に対する自信を強化することができる。そのためには、学びの土台である乳幼児期に、周囲の環境に興味・関心を抱き、遊び込む経

験をしっかりとすることで、自信をもって様々なことに取り組める学びに向かう力を十分に養っておきたい。

そこで重要となってくるのが、子どもを取り巻く環境である。遊び込む経験が存分にできる環境を設定することが保育者の重要な役割である。保育者と子どもが深い信頼関係を築くことで、子どもたちは周囲の環境に安心して働きかけることができるようになる。そのためには保育者が日々の活動の中で子どものニーズを理解し、ニーズに合った支援を日々行っていく必要がある。また、子どもが自ら環境との関わり方に気づき、日々の生活や遊びに取り込めるように配慮していくことも大事な役割の一つである。それは、子どもにとって身近な環境全てが遊びや活動の材料となるからである。子どもたちが環境に働きかけ、その働きかけに対する応答にどのような興味・関心を抱くかを理解し、どのように生かし、関わり、展開していくかを、保育者は考え、環境を整えることが大切である。それには何より子ども主体の遊びを大切にする姿勢を、園全体、更には保護者や地域、子どもを取り巻くすべての人が持つことが理想的と言える。そのために保育者は先頭に立って、子どもの育ちを理解し、それを実現できる環境整備を進めて行かなくてはならない。そうした人的環境の整備も保育者の役割の一つである。

「雪山研究所」は、雪といった自然事象を様々な角度から捉え、人的・物的環境を整えていったことで、継続的に変化を続けた冬の遊びとなった。除雪作業を担っている業者が、無造作に除雪した雪は、子どもたちにとっては大きな岩山のような存在となり、どうやったら登って自分たちの遊び場にたどり着けるか考える格好の材料となった。また、除雪用のアルミ製スコップやスノーダンプなど、様々な雪と関わる道具を用意することで、よりリアルな作業となり、子どもたちの意欲や発想を膨らませることに寄与することができた。大人が使う本物の道具を使うことで子どもたちの意欲を一層高めることに成功した。一方で大人用を使用することで危険も伴う所もあったので、保育者が援助しすぎてしまう場面があった。安全面を考慮しながら、日々の遊びの中で本物の道具を取り入れ、慣れていくことが必要であると反省した部分でもある。

子どもたちは、自然の偉大さや自分たちの働き掛けにも限界があることにも気づくことができた。次の日に同じ場所で続きから遊ぼうとしても、天候条件によっては遊ぶことができないことが多々あった。大雪が降れば何日もかけて掘ったかまくらは、あっという間に雪で埋まってしまう、ほとんど初めからやり直さなければならない。そうした事象にがっかりしたり、自然環境や気象状況の偉大さを感じたりすること

ができた。しかし、それが、子どもたちの遊びの意欲をそぐことにはならず、それも自然の威力や面白さとして前向きにとらえることができたのは、日々の保育の中で、「無駄なことはない」、「失敗は成功のもと」などと、前向きな声かけや関わり方を継続してきたからこ生まれた気持ちの前向きさであると同時に、子どもたちが1年の中で4か月近くも雪の降る環境で過ごしてきた経験による育ちと推測できる。どんな吹雪もやがては止むし、雪が降った後晴れば遊ぶことができるという経験を積んできた、そしてそうやって過ごしてきた子どもの経験とそうやって遊ぶことを進めてきた保育者の考えを反映しているものと思われる。保育者自身が目の前にある環境を生かし、困難なことがあっても考え方や工夫次第で遊びの環境は無限に広がっていくことを、子どもたちと一緒に感じながら整えていくことが大切である。

#### IV. 結論ならびにまとめ

本研究では、10の姿について、保育園での雪遊びの実践と観察を基にどのような姿として具体的に表れているかの検討を行った。

10の姿と雪遊びの中で観られた、実際の子どもの育ちをマッピングすることで、これらの経験が、子どもたちの価値観や遊びの在り方、更には主体性の育みに直結する具体的な姿を見られた。

子どもにとって雪や氷などの冬の事象は、興味・関心を駆り立てる魅力的な五感を刺激するものであり、五感を通じた実感を伴う最高の遊びの環境と言える。雪遊びを通じて、雪の冷たさを感じたり、雪や氷の観察をして、結晶の形が異なることに気づいたりした時の生き生きとした表情、目の輝きがそのことを物語っていた。何よりも心が動く瞬間が沢山あり、原体験として繰り返し行われることで、これからの学びへの繋がりを期待される経験を十分に積み重ねることができたと言える。

雪深い降雪地帯では、大人の視点からみると冬季間の活動や遊びが制限され、生活においては除雪作業などの不便が生じるといったネガティブな考えになりがちである。しかし、別の視点から見ると沢山の利点や面白さに気付くことができる。例えば大人にとって重労働である除雪作業は、子どもにとっては新鮮で、大人と同じようにやってみたいという感覚を持つ。除雪作業を子どもの頃から家族や保育者と協力して行うことで、家族間あるいは保育者との絆や助け合いの気持ち、協力することの大切さを肌で感じ、自分も役に立っているという実感を持つことができる。このことは、同一化という適応規制に当てはめることが出来、

自分の好きな人（親）と同じ行為をすることで、自分を好きな存在と同じにしたいという欲求を満たし、自分の存在を確認し、自己肯定感を高めることができる。加えて、得られた自信や自己肯定感は、遊びを始めとした様々な場面で、活動への意欲という形で発揮され、主体的な活動としての遊びの経験やその活動に必要な機能・能力の発達に寄与することが期待できる。

また今後の課題として、保育者としての存在や考え方について次のような課題が挙げられる。

子どもは、大人になるにつれて様々な経験を積み、様々な知識を得ていくと同時に、よくも悪くも子どもの頃の純粋な疑問やアプローチを幼いと感じるようになっていく事も事実である。それは余計なことは極力行わない大人社会の中では、当たり前のことではあるが、保育者である以上、子どもの頃の感覚を忘れてはならない。なぜなら保育者がこのような環境をどう生かそうと考えるかで、子どもの育ちが大きく変わっていくからである。「親は子の鑑」と言われるように、保育者も子どもにとって憧れであり鑑になりうる存在である。つまり子どもたちにとって、どのような環境で生活し、遊び込む体験をするのかが子どもにとっての自己を育む発育発達における重要な環境要因となりうるからである。子ども単独では解決できないことは数多くある。しかし、子どもの身近にいる保育者が、子どものニーズをくみ取り、必要な環境を整えて、子どもの育ちやそれにかかわる経験を支えていく事で、それは達成することができる。

そのためにも、10の姿は重要な保育の指針として捉える必要がある。しかし、実際の現場では10の姿に対する理解不足や実際の保育との照らし合わせなどが、十分に成されていなかったり、達成目標ではないと理解はしているものの、個別に取り出そうとしてしまったりするなどの課題が見られる。10の姿を保育の中で生かしていくためには、10の姿への理解や保育者同士の連携が必要となる。

10の姿が3本柱の何を反映しているか、具体的な姿として表れているのか、そこに至るためにはどんな経験を積んでいくべきか、園内の保育者全員で情報を共有し、多角的な視点で子どもの育ちを検討していくことが望まれる。保育者自身の学びを充実していくと共に、子どもたちが興味を抱けるような環境構成や動線、配慮をこれからも子どもたちと共に工夫して行うだけでなく、保育者間での情報を交換・共有することで、自分以外の視点、評価の方法、発想のヒントを得ることができるようになる。そのことで、子どもの主体的な遊び及び学びの機会を提供し、支え、子どもが主体的な遊びの経験を積んで、主体的に生きる力を育んでい

けるよう努めていきたい。

#### 参考文献

- 1) 厚生労働省：「保育所保育指針解説」 フレーベル館 2018.3.23
- 2) 文部科学省：「幼稚園教育要領解説」 フレーベル館 2018.3.23
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省：「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」 フレーベル館 2018.3.23
- 4) 無藤 隆：「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」 株式会社東洋館出版社 2018.3.30
- 5) 横山洋子：「子どもの育ちをサポート！生活とあそびから見る「10の姿」まりわかりBOOK 株式会社ナツメ社 2021.3.29
- 6) 大関嘉成他：「幼稚園におけるカリキュラム・マネジメントのためのカリキュラム評価表作成の試み」 羽陽学園短期大学紀要第11巻第1号 2019.2 pp.23-35
- 7) E.L.デシ（著）・安藤延男他（翻訳）：「内発的動機づけ－実験社会心理学的アプローチ」 誠信書房 1980

